体験通し自身を育てる

団体行動型から班別自主行動型、あるいは体験型へと移行してきた中学校の修学旅行。時代とともに絶えず変化を続ける中で、班別自主行動の実施率に低下傾向が見られる。一方、体験的な学習活動は積極的に取り入れられている。普段、学校ではできない「またとない学習の機会」と捉えられているようだ。しかし、体験学習の学習効果や安全性の確保、費用対効果などの問題や課題を指摘する向きもある。学校が求め、実施している旅行の実態をリポートする。

可能性を引き出す研修で自主的な人材を育成する

八千代市立 大和田中学校
福島県・山形県　2泊3日
13年5月　実施

閑静な住宅街に位置する八千代市立大和田中学校（若松竜二校長）は、学級数23、生徒数837人の大規模中学校。教育理念は「生徒を家族・地域・日本社会の宝として育み、社会の次代を担う人材に育成する」とし、生徒の可能性を信じて、可能性を引き出す教育を実践する。

具体的には昨年「ノーベル賞構想」を立ち上げた。クラスごとにいる各教科のリーダーが、授業を頑張っている生徒や調べ学習ですばらしい発表をした生徒などを推薦し、学校全体で表彰を行う。探求心、創造力の旺盛な生徒、工作、技術、社会貢献も対象で、高校生クイズ日本一を目指す生徒や、老人ホームでコンサートを行った吹奏楽部なども表彰されている。

学校教育の総仕上げとして実施する修学旅行は、毎年3年生の5月に行う。今年は5月15日から2泊3日で、福島県会津若松市と山形県置賜方面に9クラス315人が向かった。

民泊先できのこの菌つけを経験した生徒たち

斎藤新一教頭（左）と髙橋朋之教諭

今年の修学旅行の目標は集団の力の向上や、自主性、責任感、コミュニケーション能力を養うなどを掲げた。特に教育理念と合致する自主性の向上には力を入れた。

準備と事前学習は2年生から始めた。教師はまずリーダーを育成するため、実行委員を集め、その中から実行委員長や部屋長、保健入浴、レクリエーション、学習しおり、掲示物、食事美化、民泊などの各係のリーダーを決めた。連絡事項は各リーダーから生徒たちに伝える。どういうふうに働きかけるか自分たちで考え、一緒に働きやすい空気を生徒同士で作っていった。

修学旅行実行委員を担当した髙橋朋之教諭は「生徒が中心になって、自主的に事前活動、事後活動を進めた。生徒中心というのは生徒が全部やるのではなく、生徒の力を教師が引き出し、活動を促す。自分たちが中心となって作っていると思えることが生徒のやりがいにつながる」と語る。

会津若松では班別行動で街を見学

民泊先では野菜の収穫を手伝った

生徒たちは自主的に作業を行った

お別れ式。1泊の民泊でも涙を流して別れを惜しむ生徒も

修学旅行1日目は福島県の会津若松に向かった。大和田中が福島県を訪れるのは初めて。近年は山形県で2泊3日の民泊が恒例となっていた。昨年は震災の影響を気にする声があがり長野県に変更したが、今年はあえて会津若松を行程に組み込んだ。

斎藤新一教頭は「教師の中から震災学習を行いたいという声があがり、ボランティアの受け入れ先を探した。しかし9クラスも活動できるところはもうなかった。それでは観光や土産を買うことで貢献できればと会津若松をコースに入れた」。会津若松では班別行動とし、鶴ヶ城会館や飯盛山、武家屋敷などを観光した。

夕方には山形県南陽市の赤湯温泉に移り「いきかえりの宿　瀧波」と「上杉の御湯　御殿守」に分宿した。旅館文化を味わってほしいと、修学旅行ではあまり使わないような高級旅館を宿泊先に選んだ。旅館内ではスケジュールにゆとりをもたせ、旅館を楽しみながら、過ごし方やマナーの学習をした。

2日目は民泊先の6地区（高畠、飯豊、白鷹、米沢、川西、長井）に分かれて対面式を行った後、各家庭に分かれて活動を行った。主に野菜の収穫や植物、椎茸などの栽培など農作業が中心。料理屋の手伝いという家庭もあった。民泊先は旅行会社の東日観光が、観光物産協会と協力して選んだ。

「うれしいことにどの地区も思い出に残る民泊になるよう工夫してくれている。その家で収穫した餅米で餅つきをしたり、トラクターに乗せてもらったり、貴重な経験ばかり。その気持ちが生徒に伝わり、民泊先では自主的にすがすがしく働く姿をたくさん見ることができた」と斎藤教頭。

「民泊先の人たちの人柄に触れて、自分も優しくならなければと自分を振り返るようだ。人と触れ合うことで新たな自分を見つける」と宿泊交流の手応えを感じる。

事後学習で民泊の思い出をまとめた新聞には「最初、民泊は嫌だと思っていた。行ってからは楽しくてもっといたいと思った。山形は第2の故郷になった」などとまた行きたいと書いた生徒が多かった。

大和田中の教育理念と修学旅行の狙いである、生徒の可能性や自主性を引き出す人材作りの目標も十分に果たせたと総括する。斎藤教頭は「生徒がよく動いていた。修学旅行を通して、もともと多かったリーダーがさらに増えて、生徒だけで何でもやっていた」。髙橋教諭は「事前学習を徹底的にやったので生徒が自主的に動き、教師は行ってからすることがなかったくらい。1泊の民泊で家族に溶け込めるか不安だったが、思っていた以上に心の交流ができた。人との出会いとつながりをこれからも大切にしてほしい」と考える。

震災被災地を直接体験 支援活動の必要性学ぶ

目黒区立 東山中学校
宮城県気仙沼　3泊4日
12年6月　実施

気仙沼大島中学校との学校間交流合同写真

東京都の目黒区立東山中学校（片柳博文校長）は、2007年から現在まで宮城県の気仙沼大島で、1年次の自然宿泊体験学習を行っている。今年は6月25日から3泊4日で実施した。この間、11年3月に東日本大震災が発生。震災から3カ月ほど後に予定していた分だけは中止せざるを得なかったが、翌12年6月には早くも再開した。

震災前と震災後では、自然宿泊体験がどう変わったのか。再開第1陣、12年6月コースを引率した小川隆一教諭は語る。

「従来の宿泊体験は、中学生になったことの意識を高めるオリエンテーション的な意味あいと、気仙沼大島中学校との生徒間交流による人間性の育成などが狙い。いわば、林間学校的な意識でも参加できたはずだが、震災後は被災地支援活動という新たな一面が加わった」

小川隆一教諭

この新たな一面の被災地支援は、生徒にとって重かったはずだ。オリエンテーションは、仕組みやルール、学習の進め方などを教えて、新しい学校とであり、多少の浮かれ気分は許容範囲と言えなくもない。だが、そうした気分では、震災の被災地支援と異質なものになってしまう。

東日本大震災の津波は、全長約60㍍の大型巻き網漁船・第18共徳丸（330㌧）を、港から約750㍍離れた気仙沼市街地まで運んだ。同市は震災の記憶を伝えるモニュメント化をしたい意向だったが、今年7月に市民全世帯を対象にしたアンケートで「保存の必要はない」とする回答が約7割に達し、今後、解体撤去されることになった。

再開第1陣のコースをトレースしながら、震災後の変化を追ってみる。

初日の6月26日は、東京から新幹線で一関へ。観光バスに乗り継いで気仙沼市へ入り、魚市場を見学したあと、気仙沼港からフェリーで気仙沼大島に到着。フェリーターミナルのある浦の浜では、気仙沼大島中学校の生徒たちの歓迎を受けて、合同の入島式。その後は学級ごとに民宿や休暇村へ向かい、そこで分宿。旅程表的に列挙すればそれだけだが、一関から気仙沼港へ至るルート上で、生徒たちは震災と津波の恐ろしい現実を目の当たりにした。

それは、JR鹿折唐桑駅前で存在感を誇示する大型漁船・第18共徳丸（写真とキャプション参照）だ。巨大な船が民家を次々と押しつぶした当時の光景を知らなくても、船が陸地にあることが論外でしかない。船の姿が目に入った瞬間「生徒たちのざわめきが消えて、バスの中が沈黙で包まれた」（小川教諭）という。生徒にとって、被災地支援活動の意味を真摯に考える端緒になったことは間違いない。それを見せるために、観光バスは迂回していた。

地元被災者から被災時の体験を聞く

十八鳴浜で清掃活動

体験学習でイカの塩辛づくり

2日目の午前中は、気仙沼大島中学校の生徒と十八鳴浜（くぐなりはま）で清掃活動。国の天然記念物に指定されている十八鳴浜は、いわゆる鳴き砂の浜辺で、砂が汚れると鳴らないため清掃は大切だ。

午後は、田中浜へ移動し地引網やカキの種付け作業を体験、さらに体験学習（びんだま、がんづき、イカの塩辛づくりから一つ選択）をした。この辺りになると平素の屈託ない中学生に戻っていたようだ。体験学習で多くの生徒がイカの塩辛づくりを選択していた。小川教諭が理由を聞くと「自分で作ったものをお父さんお母さんへの土産にしたい」との答え。

3日目は、島内のオリエンテーリング、体験学習（前日同様）の後、夕刻からキャンドルサービスによる慰霊祭、地元被災者から被災時の話や復興の動きなどを聞いた。4日目は、中尊寺を見学して帰京の途へ。

同校と気仙沼大島での自然宿泊体験は、目黒区と気仙沼市の関係にもつながる。両者は古典落語の「目黒のさんま」が縁となり、民間ベースで始まっていた交流が、10年には友好都市協定の締結にまで至っている。

同校では、06年の修学旅行で気仙沼方面を訪れている。首都圏の公立中学校の修学旅行は、京都や奈良などの関西方面が圧倒的に多い。小川教諭は、赴任前のことで詳細不詳としながらも、「他校に準じたのでなく、中学時代に修学旅行で見学しておくべき日本の古都といった位置付けから、必然的に従前の関西方面へ戻したようだ」と語る。

そして、1年生の気仙沼自然宿泊体験、3年生の関西修学旅行の形は、この先も続くようだ。

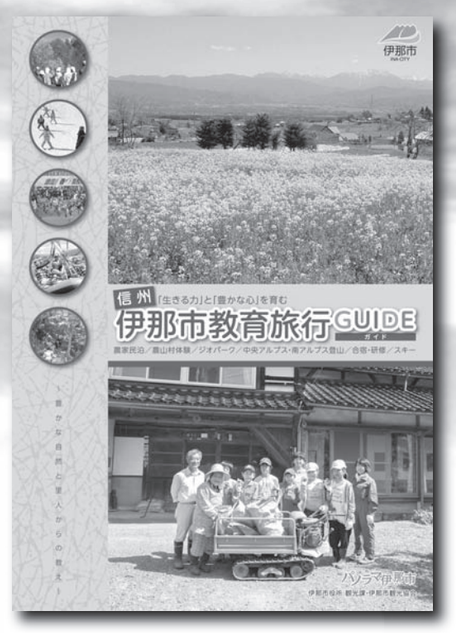
さまざまな体験プランも取りそろえております。

日帰り農村体験ほっとステイ　キャンプファイヤー　陶芸　乗馬　カヌー

下見プランもご用意しております。
各体験プランとホテルを下見していただける、教職員の皆様向けの人数限定・無料宿泊（一泊二食付）、日帰りプランです。
お問い合わせ・詳細は
担当　池の平ホテル　小池 090-7015-5485
白樺高原ホテル　湯本 090-3060-0096

SHINSHU SHIRAKABAKO 白樺リゾート 池の平ホテルグループ
〒391-0392 長野県茅野市白樺湖
池の平ホテル 予約センター　TEL（0266）68-2100/FAX（0267）55-6369
白樺高原ホテル 予約センター　TEL（0266）55-6204/FAX（0267）55-6524
池の平ホテル　検索　http://www.ikenotaira-hotel.co.jp

毎年3100校以上にご来県いただいている
信州・長野県への学習旅行は



お問合せ・資料請求先
伊那市役所　観光課／伊那市観光協会
TEL:0265-78-4111　FAX:0265-78-4131
ikk@ikk.inacity.jp
http://inashi-kankoukyoukai.jp/
〒396-8617 長野県伊那市下新田3050

お問合せ・資料請求先
（一社）信州・長野県観光協会
TEL:026-238-9670　FAX:026-232-3220
E-mail:gakushu@nagano-tabi.net
http://www.naganoken-gakushuryoko.net
〒380-8570（住所不要です）
長野県庁東庁舎2階 長野県観光協会内